

令和4年度「大学生の力を活用した集落復興支援事業」

活動報告書

獨協大学 入水チーム

(田村市滝根町入水行政区)

◆目次

1. はじめに
2. 活動の概要
3. 田村市入水行政区の概要
 - (1) 田村市の位置
 - (2) 田村市の地理的概況
 - (3) 田村市の産業
 - (4) 入水行政区の概要
4. 入水行政区の観光資源
 - (1) 入水鍾乳洞の現状
 - (2) 入水寺と三十三観音像
5. 入水行政区周辺の観光地
 - (1) あぶくま洞
 - (2) 星の村天文台
 - (3) 仙台平
6. まとめ

1. はじめに

本報告書は、福島県による令和4年度「大学生の力を活用した集落復興支援事業」の委託を受けて獨協大学外国語学部・経済学部・法学部から参加した5名の学生が行った活動を記録したものである。5名の学生は学部や学年は異なるものの、学業の傍らにもかかわらず、少人数ゆえのチームワークをもって本活動に積極的に携わってきた。限られた調査期間をもとにしているため、必ずしも十分なものではないかもしれないが、本報告書には、現地を訪れて地域の皆様と交流する中で学生たちが学び感じた様々な感想や課題、あるいは発見された可能性なども多数含まれている。一方で指導教員が最低限目を通してのもの、不十分な点や不適切な表現、用語や書式の不統一も多数存在しているかもしれない。この点については、発展途上の学生ということでご容赦いただきたい。

7月の事業採択後、当初は夏季休業期間中に現地を訪問し、入水鍾乳洞をはじめとした観光資源の調査や地域の皆様との交流を予定していた。しかし、新型コロナウイルス感染症の流行拡大を受け、行動制限はなかったとはいえ、現地調査は延期せざるを得なかった。そのため当初は現地とオンラインでのミーティングなども行った。

結果として、感染拡大がひと段落し、地域での活動が可能になったのは、入水鍾乳洞の水が冷たく感じられ、Bコースを体験すると手足の先の感覚がなくなりそうになる10月になってからであった。さらに寒さが増した12月には2回目の調査を行ったが、この時は薪ストーブのぬくもりの下で幅広い世代の方々と意見交換をすることができた。いずれの調査の場でも、地区役員の皆様をはじめとした皆様には暖かくお迎えいただき順調に活動を進めることができた。

あらためて、新型コロナウイルス感染拡大のさなかにもかかわらず、我々を受け入れてくださった田村市滝根町入水行政区の皆様には心より御礼申し上げます。報告書がインターネット上で公開されるため、逐一お名前を挙げてのお礼は控えさせていただくが、第1回調査では行政区周辺の様々な観光資源をアテンドしていただいた上に、鍾乳洞にも同行していただいた入水行政区長様をはじめ地区の役員の皆様、窯焼きピザで最高の時間を提供していただいたり、三十三観音めぐりのために山道の整備をしていただいたり、鍾乳洞体験を支援していただいたり、何より学生たちのつたない質問に丁寧にご対応いただいた入水行政区の皆様や滝根町観光公社の皆様には心より感謝を申し上げます。この報告書が、次年度の活動、さらには入水行政区の発展に少しでもお役に立てれば幸いです。

2. 活動の概要

本年度の主たる活動は、以下に概要を記す2回の現地調査である。またこれらの調査の前後には、オンライン会議システムを利用したミーティングを複数回行っている。あわせて2月11日に行われた報告会に向けたミーティングなども複数回行っている。このほか12月に獨協大学内で行われたイベントにおいて、「あぶくまの天然水」の販売及び田村市の観光パンフレットの配布を行った。

(1) 第1回現地調査

第1回現地調査は、地域の資源を把握し魅力を発見すること、住民の生活実態や意識調査を行い地域の抱える課題を共有すること、地域住民と学生のワークショップを通じて、活性化の方策について意見交換を行い、これからの到達目標について共有することなどを目的に以下の日程・内容で行われた。

○日時：2022年10月15日（土）～10月16日（日） 1泊2日

○参加者：学生4名、指導教員2名

○視察場所：入水鍾乳洞、鍾乳洞入り口の売店・釣り堀センター、パンカラ小屋、がもう農園、仙台平展望台、あぶくま洞、星の村天文台、針湯荘、菅谷神社、入水寺、入水三十三観音巡り、入水集会所

なお、10月16日の13:30から入水行政区の皆様と入水集会所にて意見交換会を行った。行政区長をはじめ9名の地区役員の皆様と学生の間で活発な意見交換が行われた

(2) 第2回現地調査

第2回現地調査は、行政区内の幅広い世代や立場の人々と意見交換の場を持つことによって、地域が抱える課題や活性化の方向性についてより具体的に検討するために、以下の日程・内容で行われた。パンカラ小屋では、地区在住の20代～30代の方々を中心に、入水集会所では前回に引き続き地区役員のみなさまと意見交換を行った。また意見交換会終了後はパンカラ小屋で有志メンバーによる意見交換会を継続して開催した。

○日時：2022年12月10日（土）～12月11日（日） 1泊2日

○参加者：学生1名、指導教員2名

○視察場所：入水鍾乳洞、パンカラ小屋、星の村ふれあい館、入水集会所

3. 田村市と入水行政区の概要

ここでは田村市のウェブサイトならびに福島県のウェブサイト「たむら地域の農業概要」¹などを参照しながら、今回の調査の対象となった福島県田村市滝根町入水行政区の概要について簡単にまとめたい。

(1) 田村市の位置

田村市は、阿武隈高原の中央に位置する。平成17年3月1日に田村郡7町村の内、滝根町、大越町、都路村、常葉町、船引町の旧5町村が合併して現在の市域が形成された。田村市は新幹線駅のある郡山市まで約30kmの位置にあり、東部で郡山市、西に三春町、北は二本松町と葛尾村、東は浪江町、大熊町、川内村、南はいわき市、小川町にそれぞれ隣接する。また浜通りとの結節点となる地域である。市の面積は458.33平方キロメートルで、土地利用区分をみると、全体の約67%を山林が占める典型的な中山間地域である。



図 3-1 田村市の位置

(出典：田村市公共交通活性化協議会 HP²)

(2) 田村市の地理的概況

田村市には阿武隈山系が南北に走り、北から日山(1,057m)、移ヶ岳(995m)、鎌倉岳(967m)、高柴山(884m)、大滝根山(1,192m)、羽山(970m)などが連なり、丘陵起伏が連続しながら地形が形成されている。また、これらの山岳を源に、大滝根川や高瀬川などの多くの河川が地域を流れている。気候は、年間の気温較差が大きく、降雨・降雪量は少ない内陸性気候の特徴を持っている。寒候期においても、降雪期間は短くなっている。

¹ <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/36221a/no-gaiyou30.html>

² https://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/1/assets/tamurasitiikikoukyoukoutuukeikaku_honpen.pdf

(3) 田村市の人口

田村市の人口は約 38,000 人であり、1980（昭和 55）年をピークに現在まで減少傾向にある。総人口の減少が続く一方で、65 歳以上の高齢者層の人口は大きく変わらない。そのため、高齢化が進展し、2040（令和 22）年の高齢化率は 40%を上回る見込みである。船引地域に人口が集中しており、特に市内の交通結節点となる JR 磐越東線船引駅周辺に人口が集積している状況にある。今回調査対象地となった滝根町は市内でも比較的人口減少が急速に進む地域であると考えられる。

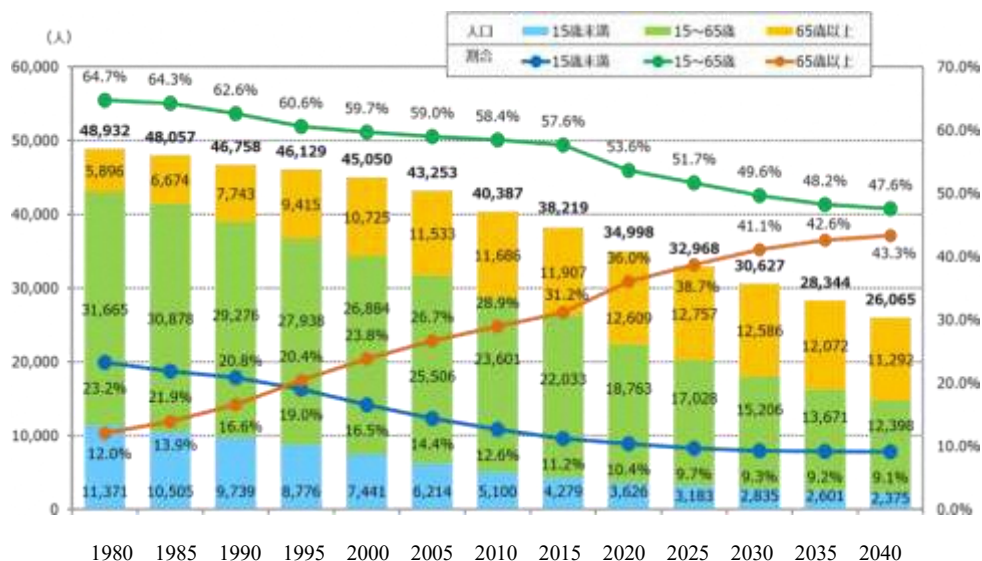


図 3-2 田村市の人口の推移

(出典：田村市公共交通活性化協議会 HP)

(4) 田村市の産業

田村市では第一次産業就業者数が全就業者の約 20%を占め、農林業が基幹産業となっている。総面積 65,617ha のうち耕地面積は 8,630ha で水田が 4,475ha と半数以上を占めている。一方で、普通畑も 4,152ha と 4 割以上を占めており、県平均に比べ畑の占める割合が大きいのが特徴である。水田面積が 2,790ha と県全体の約 3%を占めているほか、基幹作物としては、葉たばこが収穫量で福島県全体のおよそ 36%を占めており、福島県内の葉たばこの主要な生産地となっている。また、新たな取り組みとして地域特定野菜の産地形成化を図り、農産品のブランド化を推進している。

一方で合併後の田村市は、あぶくま洞をはじめとした観光地を有する地域となり、観光産業もまた重要な産業になりつつある。2020（令和 2）年に策定された『第 2 次田村市観光振興計画』では、目指すべきビジョンを「魅力ある阿武隈高原観光の産業化による地域の持続的発展～あぶくま洞から始まる市内周遊ルートが織りなす満喫感の創出～」と定め、様々な施策が検討されている。本活動の対象地域である田村市滝根町入水行政区に位置する入水鍾乳洞もまたこの計画の中では重要な役割を果たすと考えられる。

(5) 入水行政区の概要

ここでは調査で地域の方から伺ったお話をもとに、入水行政区の概要についてまとめる。今回お世話になった入水行政区は、田村市滝根町菅谷地区にあり、磐越東線（ゆうゆうあぶくまライン）菅谷駅のほど近くに位置している。菅谷駅の駅舎は比較的新しく清潔で、冬には夜間イルミネーションも行われている。菅谷地区は、入水行政区のほか畑中、石神など5つの行政区があり、入水鍾乳洞だけでなくあぶくま洞があるエリアも含まれる。

菅谷地区全体では、大字会が年に2回開かれており、8月15日には夏祭りなども企画されている。11月3日には菅谷神社の例大祭も行われているほか、正月には初詣のくじ引きがあったり、菅谷地区畑中で伝承されている太神楽も披露されたりするそうだ。ただし菅谷地区の青年団は3年ほど前に人手不足で解散したという。震災前は、菅谷地区に菅谷小学校があり、入水行政区の小学生も通っていた。全校で70人程度が通っていたようだが、東日本大震災によって校舎が被害を受け、耐震基準の問題もあって閉校となった。現在地区の小中学生は、滝根町神俣地区にある滝根小学校にスクールバスで通っている。地区の方によれば、入水行政区の小中学生は10人ほどではないかという。

入水行政区は、磐越東線と新町街道周辺に農地が広がり、鍾乳洞や仙台平の方向に向かって山になっている。農家は自家消費中心の兼業農家が多いそうだが、減農薬野菜の直接販売を手掛けている農園もある。行政区はさらに、太子堂、小入水、大入水、馬場、作田下の小字に分かれており、それぞれ組長が2年の任期で選出される。各組の組長に行政区長と副区長、庶務で行政区の役員が構成されている。今回の調査では、この役員の方々のほか、婦人会や生活改善グループの皆様にもお世話になった。

地域の方々から伺ったところ、入水行政区全体では約60戸の家がある。それほど空き家が目立つわけではないが、現在70代～80代の世代の家が多く、とくに80代が多いため、あと10年後が心配という声が聞かれた。一方で小学生がいる家庭があるように、3世代で同居している子育て家庭や、20代から30代の方も暮らしている。今回2回目の調査では、この世代の方々のお話を伺うこともできた。



図 3-3 菅谷神社

(出典：筆者撮影)

4. 入水行政区の観光資源

ここでは、本年度行われた2回の調査および『第2次田村市観光基本計画』、田村市ウェブサイトなどをもとに、入水鍾乳洞を中心とした入水行政区の観光資源についてまとめる。

(1) 入水鍾乳洞の現状

全長約900mからなる入水鍾乳洞は、「冒険心くすぐる地底空間」というキャッチフレーズを掲げる国指定天然記念物の観光地である。田村市における主要観光地においても「あぶくま洞」に続く2番目の入客数であり、その数は2019年には15234人にのぼる。しかし、前年の2018年では17856人と約2000人減少している状況である。

鍾乳洞のコースには、小さい子どもでも楽しめる整備された約50mのAコース、最低限の明かりの整備こそあるが、流れる水の中を進む約600mのBコース、そして要予約制、明かりはなく、案内人がつく約900mのCコースに分かれている。AコースからCコースまで、入口が異なるわけではなく、コースによって折り返し地点が異なるつくりであり、観光客は先述したコースの長さの倍を冒険することになる³。



図 4-1 入水行政区の鍾乳洞入り口看板

(出典：筆者撮影)

³ 入水鍾乳洞公式 HomePage, <https://www.irimizu.com/>, 最終閲覧日：2023年2月1日



図 4-2 入水鍾乳洞案内図

(出典：筆者撮影)

筆者らは、10月15日にBコースの体験を行った。10月の平均最高気温が20度前後、平均最低気温10度前後である田村市で、10月15日当日の天気は曇りに近く、筆者らは長袖長ズボンの服装で汗をかかずに行動できるような気温だった。しかし、入水鍾乳洞に入ると、冷気がすぐに感じ取れ、5度近く気温が下がったような温度であった。

Aコースでは、若干足元に水があるが、階段や、床には鉄板があり、気軽に散策が可能であり、小さな子どもがいる家族連れなどがメインの観光客となりそうなコースである。筆者らも鍾乳洞内の温度よりも、さらに冷たい水に高揚感を抱き、わざと水に浸かるなど、そこには冒険の雰囲気だけを味わう楽しみがあった。



図 4-3 入水鍾乳洞 A コース入口

(出典：筆者撮影)

Bコースに入ると、水は膝まで迫り、道を歩くような行動は不可能になり、しゃがむ、四つん這いになるなど、様々な動作が必要になる。Bコースは、ほとんど手付かずの鍾乳洞であり、進んで5分ほど経つと、筆者らほとんどの心が折れかけるほどの水温の冷たさであった。公式HPには「10度以下、痛さを感じるほど」と記載があるが、10分ほど経つと、痛みすら感じなくなり、感覚が麻痺する。コースの中には「胎内くぐり」などの大柄な人間であれば、通るのに苦戦した場所や、視界不良の為、頭をぶつけるなどのアクシデントが多く発生し、まさにキャッチコピーの予想を超えた「冒険心くすぐる地底空間」であった。

観光客として訪れた入水鍾乳洞に対して現在プロジェクトの具体的な方向性が定まっていないこともふまえ、今後の課題となるポイントは、①釣り堀センター跡の活用、②入水鍾乳洞入口売店、の二つに整理されると考えられる。

① 釣り堀センター跡の活用

入水鍾乳洞は駐車場から少し坂を登った場所にある。駐車場の場所には釣り堀センターの跡があり、現在は有効活用の糸口を探っている。中にはものづくり体験ができそうなスペースの他、軽食の調理、販売スペース、おみやげ売り場の跡がある。12月11日の意見交換会では、この釣り堀センター跡の活用が提案としてあがった。

今後の方針の一つとして、地元農産品の販売や、ものづくり体験などの施策が考えられるだろう。入水鍾乳洞での観光終了後の観光客の訪問が期待される。



図 4-4 つり堀センター跡外観

(出典：筆者撮影)



図 4-5 つり堀センター跡内部

(出典：筆者撮影)

② 入水鍾乳洞入口券売所について

入水鍾乳洞入口の券売所では、蝋燭や、ヘッドライト、サンダルなど特別な準備なしでも入洞できる最低限の商品を販売している。しかし一方で、気温の関係で夏での観光がメインである為、温かい飲み物の販売などはなく、冷え切ったままでの着替えとなった。入口売店にて温かい飲み物の販売や、鍾乳洞内でのスマートフォン使用の為の保護ケースの販売などを提案したい。

筆者らは調査活動の一環として、高性能のカメラを持ち込み、撮影を行ったが、多くの観光客は鍾乳洞内の水が原因でスマートフォンをはじめとしたカメラを持ち込むことはしないと考えられる。一般の観光客が行くのは基本 B コースまでと考えられ、B コースの最終到達地点であるカボチャ岩との写真撮影とともに「最後まで行った」という証拠を残せる工夫が必要だと考える。



図 4-6 入水鍾乳洞券売所

(出典：筆者撮影)

(2) 入水寺と三十三観音像

三十三観音像は入水寺(にっすいじ)の裏山にあり、山道の最中に観音像が設置してある。入水寺内には、三十三観音像の説明とマップの設置があり入口に続いているが、必ずしも観光用に整備されているわけではない。三十三観音像は、整理して並んでいるのではなく道なりに沿って並んでおり、中にははっきり立っているものではなく草などに隠れているなど、自然のまま置いてあるのが見受けられた⁴。

観音像を目的に入山したが、端正な林の姿が見え、観光客のフォトスポットは林だと予想される。入水寺では、一般社団法人 Switch が主催するヨガや坐禅会が実施されており、地域コミュニティの活性化に寄与している。その他、梅の収穫体験の試みを行っており、地域コミュニティの一部として利用の促進が行われていた。また、入水寺には木造聖観世音菩薩立像(町指定有形文化財)が観音堂に安置されている。

スマホ断ちなどの俗世からのデトックスが注目される中、坐禅やヨガは一つのデトックス方法だと考える。地域コミュニティとしての可能性のみならず、体験型観光の一つとして活用できないか模索していくことが可能ではないか。



図 4-7 三十三観音像

(出典：筆者撮影)

⁴ 田村市 “「三十三観音」 令和 4 年 12 月号掲載” 田村市ホームページ,
https://www.city.tamura.lg.jp/soshiki/30/bunkazai_kannon.html, 最終閲覧日：2023 年 2 月 1 日



図 4-8 三十三観音像の説明

(出典：筆者撮影)



図 4-9 三十三観音像の案内図

(出典：筆者撮影)



図 4-10 植林された杉林

(出典：筆者撮影)

5. 入水行政区周辺の観光地

(1) あぶくま洞

あぶくま洞は、入水鍾乳洞から車で約 10 分、6.5km 離れた田村市滝根町菅谷東釜山に位置している。田村市の観光は、バスや電車などの公共機関の本数が少なく、不十分なため車での観光がほとんどだと考えられる。それを考慮すると、入水鍾乳洞から 10 分の距離にあるあぶくま洞は、観光客を集めるスポットとして絶好の比較対象と言える。現状として、入水鍾乳洞とあぶくま洞の入洞者数の差異は大きい。『第 2 次田村市観光基本計画』によると、2019 年のあぶくま洞の入込客数は 185,221 人で、入水鍾乳洞は 15,234 人である。また同報告書内では、「市の主な観光資源への入込客数は、あぶくま洞へ一点集中化(平成 22 年(2010)67.2%→平成 30 年(2018)60.5%)している状況にあり、震災前後で変わりありません」と紹介されるほどあぶくま洞は田村市を代表する観光地とされている⁵。

実際に訪れてみて、筆者はあぶくま洞に対して「気軽に楽しめる」という感想をもった。あぶくま洞には、通常コースの中に探検コースと言われる狭いところに入ってかがんだり、丸太の橋を渡ったりするコースがある。ただ、探検コースに入っても濡れたり、極端に狭かったりすることはなく普段着のままでの入洞が可能である。加えて、いずれのコースにしても入洞料は 200 円であり、小学生未満は無料である。気軽に入洞可能なことに加え、鍾乳洞のクオリティは高く大自然のアートを十分に楽しむことができる。



図 5-1 写真スポットから撮影した洞内

(出典：筆者撮影)

⁵ ・『第 2 次田村市観光基本計画』, 田村市(2020 年 9 月
<https://www.city.tamura.lg.jp/uploaded/attachment/22638.pdf>

天井から大きく下がる鍾乳石や床下からタケノコのように堆積してできる石筍などに名前がつけられており、筆者はその迫力や自然の摂理に魅了された。中でも「滝根御殿」と呼称される洞内で最大のホールには、クリスタルカーテンやボックスワーク、洞穴サンゴなど、ここでしか見ることのできない貴重な鍾乳石が観察できるのだ。また展示方法にもこだわりがあり、さらに入洞者を楽しませてくれる。

その工夫が鍾乳洞初の調光システムで「月の世界」と呼ばれるものだ。コースの最後に、主な鍾乳洞が全て揃う場所に月の世界は存在する。ここでは、色が自然に移り変わる調光システムで、暗闇から朝日が昇り、夕日となって沈むまでが演出されている。幻想の世界のラストシーンをいっそう美しく盛り上げてくれる演出であった。それ以外にも、鍾乳石・石筍の説明や来訪者と大きな鍾乳石が綺麗に撮れる写真スポットの看板など細かな工夫が見られた。

また、鍾乳洞を出た先にはみやげ店とアイスや軽食を販売する出店があり、観光客の必要とする「楽しみ、お土産、食」がしっかりと揃っていた。鍾乳洞内で冷蔵保存されたというワインなどが売られており、おみやげという観点でも工夫が見られた。特別何か道具を用意する必要はなく、中に入れば自然の創るアートを楽しむことができるため、観光客が集まるのは納得の場所であった。



図 5-2 洞内で貯蔵される北醇ワイン

(出典：筆者撮影)

(2) 星の村天文台

あぶくま洞から車で1分、徒歩で4分の場所に位置する星の村天文台は、豊かな自然と天体観測に恵まれた立地が自慢の天文台だ。台内には県内最大口径の望遠鏡やプラネタリウムがあり、宇宙のことや天体のことを十分に学習できる施設であった。学ぶだけでなく、ロビーでは化石・鉱物発掘体験などが開催されており体験もすることができる。

またこの天文台の最大の特徴が、昼間も楽しめるという点だ。天文台というと、夜星や天体を観察するイメージがあるかもしれない。だが、この天文台には特殊フィルターの付いた望遠鏡があることで太陽も観測することができるのだ。筆者らも実際に、昼間に行われる望遠鏡見学ツアーに参加して、台長の大野裕明氏直々に望遠鏡や太陽、天体のことを説明していただいた。普段から身近にある太陽だが、直視することは難しいので、望遠鏡で太陽の表面をくつきりと観察できた経験は忘れられないものになった。

もちろん夜間も楽しめるような星空ツアーを開催していて、望遠鏡で月や惑星を観察したり、屋上で星空を観察したりできる。プラネタリウム以外にも体験型のアクティビティや県内最大の望遠鏡が揃う天文台は、老若男女楽しめる施設であった。



図 5-3 天体望遠鏡

(出典：筆者撮影)

(3) 仙台平

標高 1,192 メートルの大滝根山の西側斜面にある仙台平は、広くなだらかなくぼ地「仙台平ドリーネ」が形成されている。仙台平自体の標高は 871 メートルで眺めも良く、開けていて下を広大な自然を体全体で感じるには最適の場所であった。その地形を生かして、仙台平展望台、グライダーの離陸場などが存在する。展望台は 360 度の眺望を楽しむことができる作りで、晴れていれば会津磐梯山や那須岳などかなり離れたところまで見ることができる⁶。

⁶ NTT 東日本、「田村市滝根町「仙台平」」(不明), <https://www.ntt-east.co.jp/fukushima/fbrari/013/index.html>, 最終閲覧日：2023 年 2 月 3 日、たむランド、「仙台平」(2021 年 3 月 16 日), <https://tamuland.net/?p=2057#grider>, 最終閲覧日：2023 年 2 月 3 日

また、下を見れば滝根町の菅谷地区、神俣町の街並みが手に取るように見えるほどの開け具合だ。グライダー離陸場は、パラグライダー、ハングライダーなど愛好家によって使われている。山の斜面から、障害のない広い空へ飛び立つことができるので、最適な場所だと言える。また、展望台・離陸場付近は景色と人を一緒に撮る撮影スポットにもなっている。



図 5-4 仙台平からの眺望

(出典：筆者撮影)

筆者らも、目の前に広がる自然と一緒に記念撮影せずにはいられなかった。しかし、この展望台までくるのには、急な斜面や道になっていないような道を登ってこなくてはならないので車は必須であるだろう。ただ、関東圏で暮らす筆者らにとって大自然を目、耳、肌で感じることでできた仙台平は非日常を体験できる観光スポットであった。



図 5-5 離陸場での写真撮影

(出典：筆者撮影)

6. まとめ

(1) 調査から明らかになった課題

今回のプロジェクトでは、現地調査を行ったメンバーを中心に入水行政区の抱える課題と活性化について意見交換を行った。その結果、一部は4章の記述と重複するが、以下の点が明らかになった。

まず、入水鍾乳洞の周辺店舗の多くが閉店しているという点である。入水鍾乳洞は地域の核となる観光スポットであるが、観光に来て飲食や地域物産、おみやげ購入が難しい。もっとも近い休憩所は、星の村ふれあい館であるが、入水鍾乳洞の入り口からは少し距離があり、駐車場を出て歩く必要がある。一方であぶくま洞は、入り口のすぐ近くに売店と飲食ができるブースがあり、駐車場も同じであり、観光客が立ち寄りやすい印象を受けた。現状では、入水鍾乳洞に立ち寄った観光客はそのまま入水行政区を離れてしまい、地域との交流を持つことができていない。コロナなどで廃業をしてしまった店舗があったのは残念だが、来訪者が飲食やみやげ品購入をできる場所が復活することが望ましい。

次に、以外にも地元の人が入水鍾乳洞を訪れることも減っているという点である。今回の調査では、地元の人でも入水鍾乳洞にほとんど行かないという実態が明らかになった。また広い世代間での地元の人同士の交流が少ないという意見も聞かれた。コロナの影響で仕方がないことかもしれないが、地元若い世代の家族がいるものの、その人々を巻き込むような地域交流が十分に実施されていないのではないかという印象を受けた。

(2) 来年に向けた方向性

前項で列挙したように、入水行政区の抱える問題は「入水鍾乳洞の周辺店舗の多くが閉店している」、「広い世代間での地元の人同士の交流が少ない」ということが指摘される。これらの問題点から、私たちのチームでは入水行政区で取り組むべき活動の方向性としては以下が考えられる。

まず、入水鍾乳洞付近にある釣り堀センターの活用である。現在は、入水鍾乳洞付近のすべての店が閉店しているため、通年ではなくても、観光客の多い夏などに期間限定で売店を設定することはできないだろうか。売店では、地元の農産物の活用や農産物の加工を行う案が出ている。観光客に鍾乳洞だけではなく、地域との交流を持ってもらうことで、入水行政区や菅谷地区の良さを知ってもらう機会を増やしていくことができるだろう。

次に、体験型のワークショップの実施による地域間交流を増やすことである。調査からは、地区に比較的若い世代の家族も暮らしていることが明らかになったが、地域の活性化により積極的に関わってもらう余地があるのではないかという印象を受けた。入水鍾乳洞を活用しつつ、い家族を巻き込みながらワークショップを実施することで地域間の交流を増やしていくことに可能性があるのではないか。体験型やものづくりのワークショップを実施

し、家族で楽しめるコンテンツを企画できればよいのではないだろうか。これらの課題に取り組んで、観光客に入水行政区の魅力を知ってもらい、地域コミュニティを活性化させることが、達成すべき目標となると考える。

ただし今年度は、コロナの影響で現地調査が限られており、地域の幅広い人々から課題についてのヒアリングを行うことができなかった。また役員交代時期ということもあり、具体案の検討も遅れている。次年度継続する場合は、より一層地域の方々が感じている課題や問題点を丁寧に聞き取り、上記の方向性も含め、地域の希望や要望に寄り添った改善策や取り組みを進めていきたい。